接尾語「ぽい」の変化

小島　聡子

キーワード：接尾語，「（っ）ぽい」，若者言葉，辞書，「らしい」

最近よく聞く言葉の中に、「～（っ）ぽい」という言い方がある。「若者言葉」の一つとしてとりあげられることもあるようだが、この「ぽい」という語の流行は、実は今に始まったことではない。松井栄一（1983）『国語辞典にない言葉』にも「ぽい」を取り上げた一節の中で次のような指摘があり[1]、少し以前から、「ぽい」は新しい表現を次々に生み出す流行の語となりつつあったようである。

> 「～ぽい」という表現は若者に好まれているようだからこれからも新しくどんどん発生しそうな勢いだ。（p.169）

しかし、松井氏の指摘するところの若者の好んで使う新しい「～ぽい」は、例えば、

> 「嘘っぽい」が若い人たちの間で相当広まっているのは知っていたが、作家の文章に使われているのを目にしたのは初めてだった。（同書p.172 付記）

とあるように、「嘘っぽい」のような語に用いられる「ぽい」のことである。最近ではもはや「嘘っぽい」は完全に定着しているといってよい[2]。実際には『日本国語大辞典（第二版）』（以下『日国大』と略称）に「嘘っぽい」は採録されていないのだが、そのことがむしろ意外なほどである。そして、「ぽい」の用法の変化はさらに進んでいる。例えば、森田良行（1989）『基礎日本語辞典』の「ぽい」の項では「複合語には付かない」（p.1025）とされているが、複合語につく例も多いし、単語ではなく句に付く例や言い切りの形の述語に付くことまである。

本稿では、このような「～ぽい」という語について、もとの使い方との関連や現在見られる意味変化について考える。また、似たような意味で用いられる接尾語「らしい」の変化との関連についても考える。

１「ぽい」の用法

１．１　辞書の「ぽい」　―― もとの用法 ――

「ぽい」は、名詞および動詞の連用形、形容詞・形容動詞の語幹などに接続して[3]、全体として形容詞を作る接尾辞で、意味は、諸辞書では簡単に「～傾きがある、～しやすい」（『広辞苑』第五版岩波書店）とか、「そのような状態を帯びている意を表す」（『日国大』）などと説明される。

一般に、接尾辞の付いた派生語の場合、その接尾辞がよく使われる、つまり多くの語に付くものであるほど辞書には立項されにくい傾向がある。臨時的・一回的な派生語も多く、かつ、その意味をこ

とさらに辞書に説明せずともわかるように感じられるためであるようだが、「ぽい」の付く語もそれは例外ではない（松井栄一1983）。ただ、頻繁に使われる語、あるいはその形で定着し単なる派生ではない意味を持つようになった語などは、辞書の項目に立つ。「ぽい」の場合、現在でも接尾辞としてよく使われ、臨時的な語も多く、新しい用法も生まれつつあるが、一方で江戸末期など比較的早くから使われている語の中には一語として定着している語も多い。そこでまず、辞書の見出し語にみられる「ぽい」が付いた語から、接尾語としての「ぽい」の使い方を考えてみたい。

例えば、辞書などに見出し語としてあるのは次のような語である。（語＝『日本語語彙大系』、林＝『大辞林』[4]）

リスト①

あおっぽい【青】（林）／あきっぽい【飽き】（林）／あだっぽい【婀娜】（語・林）／あらっぽい【荒・粗】（語・林）／あわれっぽい【哀れ】（語・林）／いがらっぽい（語・林）／いろっぽい【色】（語・林）／えがらっぽい（語・林）／おこりっぽい【怒り】（語・林）／おとなっぽい【大人】（林）／きざっぽい【気障】（語・林）／ぐちっぽい【愚痴】（林）／くろっぽい【黒】（語・林）／こどもっぽい【子供】（語・林）／しけっぽい【湿気】（林）／しめっぽい【湿】（語・林）／しろっぽい【白】（語・林）／ぞくっぽい【俗】（語・林）／ちゃっぽい【茶】（林）／つやっぽい【艶】（語・林）／にがっぽい【苦】（林）／ねつっぽい【熱】（語・林）／ほこりっぽい【埃】（林）／ほねっぽい【骨】（語・林）／ほれっぽい【惚れ】（林）／みずっぽい【水】（語・林）／むせっぽい【咽せ】（林）　／やすっぽい【安】（語・林）／りくつっぽい【理屈】（語・林）／わすれっぽい【忘れ】（語・林）

これらを細かくみると、従来も指摘されているとおり[5] 語基部分の品詞によって「ぽい」の意味も多少異なることがわかる。以下に簡単に示す。

a 動詞の連用形につく場合　‥‥‥　例　　忘れっぽい、怒りっぽい、惚れっぽい　など

この場合、その動詞のあらわす事態が簡単に起こりやすいことを表す。例えば「怒りっぽい」はすぐに怒る性質であることを表す。特に、やすやすと行われるのがあまり望ましくない類の精神的活動を表す動詞に対して用いられる傾向がある[6]。また、動詞の連用形に「ぽい」の付く形は現代語としては生産性があまり高くなく、ここにあがっているもの以外では「ひがみっぽい」「うたぐりっぽい」「あわてっぽい」「うらみっぽい」などの例がある程度である。

b 形容詞・形容動詞の語幹につく場合　‥‥‥例　あらっぽい、あわれっぽい、やすっぽい、

これらは、表面上いかにもそうである様子、また、その性質が表に立って目立つ様子という意になる。

c 名詞などにつく場合　‥‥‥　例　つやっぽい、ほねっぽい、おとなっぽい、子供っぽい

名詞につく場合は、意味の傾向が二通りに大きく分かれる。

c１　「艶っぽい」「骨っぽい」「水っぽい」の類‥‥‥それが多い、またはそれが目立つ様子であることを表す。

c２　「大人っぽい」「子供っぽい」の類‥‥‥いかにもそういう印象を与える様子であること、または、そのものの性質の特徴的な一端を持ち合わせている様子、それに通じる要素が感

じられる様子を表す。

ｃ１とｃ２はどちらも「ぽい」に上接するものの印象が強いという点では通じるが、例えば「理屈っぽい」（ｃ1）と「嘘っぽい」（ｃ2）を比べれば両者の違いは明らかである。「理屈っぽい」は「何にでも理屈をつける」様子であって、「どこか理屈のように感じられる」ことなどではなく、一方「嘘っぽい」は「すぐに嘘をつく」様子ではなく、「なんとなく嘘だと感じられる」ことである。

辞書に立項されているものとしては圧倒的にｃ１の方が多く、ｃ２の例は先のリスト①の中では「大人っぽい」「子供っぽい」だけである。しかし、現在活発に新しい語を作り出しているのはｃ２の用法の「ぽい」で、例えば辞書の見出し語にはなっていないが、先述の「嘘っぽい」をはじめ「男っぽい」「女っぽい」など例が見られる。

また『日国大（第二版）』に挙げられている用例を見ると、前掲の語のうち、特に江戸時代の用例が挙がっているのは次のような語で、いずれも先の分類のａ・b及びｃ１の例といえる。

飽きっぽい（滑稽本『浮世風呂』など）・あだっぽい（滑稽本『七偏人』など）・あらっぽい（雑俳『柳多留』など）・哀れっぽい（滑稽本『浮世風呂』）・きざっぽい（人情本『花暦封じ文』）愚痴っぽい（滑稽本『七偏人』）・黒っぽい（歌舞伎『小袖曾我薊色縫』など）・しめっぽい（雑俳『柳多留』）・白っぽい（雑俳『柳多留』・滑稽本『浮世風呂』）・骨っぽい（雑俳『柳多留』など）・水っぽい（洒落本『残座訓』）・むせっぽい（雑俳『俳諧觿』）・安っぽい（滑稽本『八笑人』）・理屈っぽい（滑稽本『和合人』）　（かっこ内は用例の出典）

このうち、「黒っぽい」「白っぽい」は、現代では色彩が「黒（または白）に見えるような色である」という意で使われるのが一般的で、その限りでは「ぽい」のｃ２の例のように見える。しかし、『日国大』に江戸期の例が挙がっているのは色の意ではなく、「玄人らしい」「素人くさい」の意の場合である。「黒っぽい」「白っぽい」は「ぽい」が付いたのは、形容詞「黒い・白い」の語幹か名詞「黒・白」かの両方の可能性が考えられる。ただ、少なくとも『日国大』を見るかぎり、「玄人である」の意は形容詞「黒い」のみに見られ、「黒」にはない。「素人」の意も「白い」にはあるが「白」にはない。従って、江戸期の「黒っぽい・白っぽい」は形容詞「黒い・白い」の派生語と考えられ、先のｂに分類できる。

さらに、リスト①の語でｃ２に分類できるものを『日国大』で調べると、「子供っぽい」に1911年の用例が挙がっているのが早い例で、多くは昭和、特に戦後の例である。

以上のように、辞書に掲載された「Ｘぽい」という語を見てくると、ａ・ｂ・ｃ１の用法がもともとの「ぽい」の用法であったことがうかがえる。これらは「Ｘが多い、目立つ」ということから「Ｘの傾向が強い、簡単にＸとなる様子」などの意味を表すもので、要するに「Ｘぽい」というとき、「ぽい」は「Ｘが全体を構成する有力な要素である」ことを表している。森田良行（1989）で「その傾向･状態・要素などが色濃く現れて、その主体の一つの特異な属性となっていることを示す」とあるとおりである。

一方、そこからｃ２のような「ぽい」の用法が生み出されていることも確かである。ｃ１の場合、全体を構成するいくつかの要素の中でＸが一番目立つ・強いということで、実際にＸというものや状態が存在する。しかし、ｃ２の場合、「Ｘぽいと形容されるもの（仮にＡとする）」を構成する要素

とXを構成する要素とのどこかに共通性があり、「A」が総体としてXに近似の存在であるということを表しているのであって、Xの存在を表しているわけではない。この二つはXが名詞である場合は乖離してみえるが、例えばXが形容動詞の語幹のようなものであれば、Xの要素が強いということは全体がXのようであるということに容易に転じ得る。ただ、ｃ２でも「大人っぽい」のような場合は「全体として大人に見える」ということでXの要素が目立つという意になっているが、最近の「嘘っぽい」のような場合は、「どこかXのように見える部分がある」「どちらかというとX」という方向に変化し、Xが「強い」というのは薄れてきつつあるようである。

１．２　最近の実例　―― 新しい用法 ――

次に、現代の「ぽい」について実際の例を挙げてみる。前節で述べたように、名詞的なものに接続する「ぽい」が多く、意味もｃ２の例が多い。また、ｃ２の用法での造語力は非常に旺盛で種々の語に接続する。

１．２．１　新聞の例

例えば、試みに、佐賀新聞のデータベースを利用して1994年１月から2003年１月までの記事を検索してみると、「ぽい」が付いた語としては次のようなものを採集することが出来る。（先のリスト①にある例には下線を、『日本国語大辞典』に初版からあるものには#を、第２版で立項されたものには##を付した）

CG／DJ／SF／UK／アーティスト／アート／アイドル／#青（14）／#赤（24）／赤黒／#飽きる（21）／遊び／アナログ／アニメ／##あぶら（14）／#あらい（133）／#哀れ（2）／アンティーク／#いがら／イギリス／いじめっ子／#いたずら（63）／いたずらっ子／##田舎（2）／今／#色（26）／インテリ／嘘（19）／##疑る／宇宙人／鬱／#浮気／英語／エイリアン／エッチ／黄土／オカマ／#怒る（47）／##幼い／おしゃれ／お嬢さん／お説教／おたく（3）／おちゃめ／##男（35）／男の子（2）／お年寄りのスポーツ／#大人（38）／お兄さん／オバさん／おもちゃ（3）／オレンジ／##女（5）／女の子（4）／怪獣／替え歌／がき（2）／学生／カジュアル／##風邪（2）／カナダ人／カフェレストラン／カマ／#軽い／官僚（2）／#黄色（10）／#きざ／きつね／救世主／教科書／きわもの／草／草薙君／具象／#愚痴（5）／グランジ／#黒（259）／##玄人／現実逃避／現代／現代もの／小言／ゴスペル／こてこて／#子供（35）／#粉（3）／コメディー／紺色／コンセプトアルバム／サイバーパンク／佐賀／サブ／じいさん／#塩（2）／時代劇／舌足らず／下町／自分／自慢／#しめ（23）／社会派／ジャズ（4）／宗教／シュール／##少女／少女漫画／冗談（17）／少年／勝負師／職人（3）／書生／女性／シルバー／#白（158）／##素人（7）／死んでる／素顔／##すじ／#砂（2）／青年／説教／セレモニー／川柳／#俗（18）／そば屋／それ（3）／たそがれ（2）／脱水症状／##茶色（24）／抽象／土／土色／#つや（20）／手紙／デザイン（3）／手作り（2）／童貞／どじ／寅さん／夏／生酸？[7]／#涙（2）／ナンセンス／日本人（2）／ニューヨーク／人間（2）／#熱（401）／ハードロック／灰色（7）／ハウス／ばか（3）／派手／春／反則技／控えめ／##ひがむ／##皮肉（26）／##秘密／ピンク／ファンタジー／舞台／普通（3）／不平／ブラック／ブラックミュージック／フリーター／##不良（8）／不良ママ／ブルース／古着／変態／ボーイズ／#ほこり（20）／ボサノバ／保奈美／#骨

（15）／ポリネシアンリズム／#ほれる（3）／本物／まぐれ／マゾ／丸／漫画（3）／#水（14）／水色（2）／緑（5）／緑色／民族服／昔／#紫（2）／モード／野球選手／##やくざ／#安い（26）／優等生／ラメ／#理屈（28）／両性具有／レンガ色／ロカビリー／ロック（2）／#忘れる（18）

以上、異なり語数は２０２語である。複数の用例があったものについてはカッコ内にその数を示した。

これを見ると、辞書に立項されている語は確かに頻度が高いものが多いが、辞書にない語でも「うそっぽい」「冗談っぽい」などの語がよく用いられている。しかし、大部分は一語しか例のないいわば臨時的な語であり、それだけ「ぽい」の造語力が旺盛であるといえる。

ただし、これら辞書にない語の殆どは名詞（あるいは形容動詞語幹）であり、ほかは動詞に付いた形「うたぐりっぽい」「ひがみっぽい」、形容詞に付いた「おさなっぽい」がある程度である。この三語はいずれも『日本国語大辞典』に第二版から立項された語でもある。そのほか、「死んでるっぽい」という例が見られるが、これについては後述する。また「現実逃避」「不良ママ」のように複合語に付いた例や「お年寄りのスポーツっぽい」という句についた例もあり、「女の子っぽい」にも「普通の女の子っぽい」のように句に付いた例もある。

名詞に付いているものも、「Ｘが多い」というようなｃ１の意でなく、殆どは「どこかにそのような雰囲気が感じられる様子である」という意で、先の分類でいうｃ２の意味で用いられている。例えば「不平っぽい」というのは「愚痴っぽい」のような「不平が多い」という意ではなく、「ときには不平っぽいことを言ったりする人がある」（1996年10月25日）で「不平のような類のこと」という意である。

また、このような臨時的な語は、文化面の音楽や映画などの流行に関する記事や投書欄など、比較的口頭語や流行語が顕われやすい部分に多く見られ、逆に経済面や国際面には用例自体も比較的少なく、あっても語彙は辞書に立項されている語が殆どを占める。従って、新聞記事にあるとはいえ文章語としてはまだこなれていないといえる。

新聞記事という特性からか、例えば「調べでは、男は三十―四十歳ぐらい。青っぽい上着を着て、白い手袋をしていたという」（1997年9月26日）という記事に見られるような形の「色名＋ぽい」という例も多い。色は言葉で厳密に指定するのが難しく、大まかにこの色というしかない性質のものなので、自然と「～っぽい」という言い方が多くなるのだと考えられる。

以上のように、新聞の用例からは、「ぽい」が現代語では、ｃ２の「どこかそのように感じられる様子である」という用法で非常に活発に用いられていることがわかる。

１．２．２　新しい用法について　―― 助動詞化 ――

最近は、従来は見られなかった言い切りの形の述語につく例も見られるようになってきた。新聞の検索結果にも「死んでるっぽい」が１例があったが、これは記事に引用された小説の一節で原文は次のとおりである。

> ただ、高校に上がったころには、そういった状況にもすっかり慣れ、すべてを調子よくやり過ごす術をキリコは覚えていた。お兄さん、行方不明なんだって？ 高校で知り合った友だちから

訊かれると、うん、でももう死んでるっぽい、と明るく言ってのけた。（藤野千夜「ラブリープラネット」『おしゃべり怪談』所収　講談社文庫p.124）

このような述語の言い切りの形に「ぽい」をつける形は、話し言葉としては頻繁に使われている。例えば、インターネットで検索をすると次のような用例が採集できる。他にも多数ある。

・なんかやる気ないっぽい感じの絵でも
・世論は作られるっぽいよね
・たぶん登場ポーズが描きたかったっぽいＣＧ塗りです
・BSデジタルはいずれスクランブルがかかるっぽい
・親に見られたっぽい（泣）

上記の例で「ぽい」は「みたいだ」や「らしい」「という感じである」あるいは「そうだ」というような意味で用いられている。いずれも極度に口頭語的ではあるが、「ぽい」がその種の推量・推定を表す助動詞的なものとしての用法を獲得しつつあると言ってよい。

このような変貌は、接尾語から助動詞へと文法的に大きく転換したようにも見えるが、ｃ２の用法から変化した「どこかXのように感じられる」という意の「Xぽい」において、Xがモノからコトへと変化したというだけのことである。従って、このような用法が生まれる背景にはｃ２の用法の「Xぽい」の活発な使用があると考えられる。

２「らしい」との比較

前節で見たような「ぽい」の接尾語から助動詞への変化は、似たような意の接尾語「らしい」でも嘗て起こったことである。

２．１　接尾語としての「らしい」と「ぽい」の違い

接尾語としての「らしい」と「ぽい」は、ともに「いかにもそのような様子である」という意味の形容詞を作るという点では共通している。この２語の違いは、少なくとも現代の一般的な用法においては、「Xらしい」「Xぽい」といわれる対象が、実際にはXなのか、Xでなくてもよいのかという違いとなって現れる。例えば、「子供らしい」という語は現実に子供であるものに対して使われるのが普通だが、「子供っぽい」というのは子供に対しても大人に対しても使えるという違いである。

つまり、「らしい」はXの属性が典型的に現れた様子であることを表すのに対し、「ぽい」の方はあくまでもXに通じるような部分があるということを表す。またそのことは、「らしい」がその本分が備わっているというような比較的肯定的な評価として用いられることもあるのに対し、「ぽい」は必ずしも肯定的ではなく、否定的な評価に傾くこともあるという違いとも関わってくる。

２．２　「らしい」の変遷と「ぽい」の変遷

ところで「らしい」は、もともと接尾語だったものが助動詞としての用法をも獲得してきたものであるとされている。特に「らしい」の明治期以降の変遷については鈴木英明（1988）に詳しい。それ

によれば、助動詞としての用法、つまり言い切りの形の述語につくという用法を確立し始めたころの「らしい」には、接尾語としての用法の中に、現代の「ぽい」の一般的な用法と同様の、実際にはそうでないものを評してその性質を帯びていると表す用法があった。つまり、大人を評して「子供らしい」というような用法である。中身はともかく表面上はそう見える部分があるという、「らしい」のこのような用法から、中身はわからない、つまり実態は不明だがそうであると推察されるという助動詞としての「らしい」の用法が生まれてきたのだろうと考えられる。

これは現代、「ぽい」の用法のうち、「そのようにみえる」というｃ２の意味での生産性が非常に高く、それが高じて、新たにコト的なものについた「そうであると推察される」という助動詞的な用法まで現れてきているのと、非常に似通った状況であると言うことが出来る。

さて、このような「らしい」の変遷と「ぽい」の変遷を重ねて考えてみる。

まず、近代初期には、「ぽい」は現代のような「どこかそのような様子に見える」という意味（ｃ２の用法）ではなく、「それが多い・強い、表立っている」というような意味（a・ｂ・ｃ１の用法）で使われる傾向が強かった。一方そのころの「らしい」の方は比較的広い範囲で「そのようにみえる」という意で用いられていた。従って、そのころは、「ぽい」と「らしい」はともに比較的新しく意味も近い語ではあるが、すみわけがあったものと思われる。

しかし、「らしい」では、「そのように見える」のうちの助動詞的な用法が次第に広がっていった結果、接尾語としての「らしい」の用法は逆に特定の語に固定化する。さらに助動詞としても、今日の用法から外れるような用法は減少していき意味が限定されていくという方向に進む。また語としては当初から文章語としての側面が強かった。

一方、「ぽい」はもともと「Ｘという要素が強い・多い」という意の接尾辞で、結果的に「全体としてＸみえる」という意味が感じられるようになり、それがさらに「どこかＸに通じる面がある」という意味に薄められる方向に変化する。その変化は「らしい」の用法が硬直化して現実にはＸでないものを「Ｘらしい」といえなくなっていくのと、並行的に進んでいくように見える。つまり、「Ｘらしい」はもともと現在の「Ｘらしい」「Ｘぽい」両方の意味を覆っていたが、「Ｘらしい」の用法が狭まった結果、その間隙に「Ｘぽい」が入ったと考えられるのではないか。

また、「ぽい」は文章語的な「らしい」とは異なり、口頭語的な面が強い。「らしい」と、「ぽい」のｃ２は似ている。「らしい」を使いにくい口頭語では、ｃ２の用法の「ぽい」の方が浸透していきやすかったことは考えられる。接尾辞の「らしい」のような意の「ぽい」が広がれば、接尾辞の「らしい」で起きた変化が「ぽい」でも起こるというのは十分あり得ることであろう。実際に、「ぽい」は、「らしい」と同様に、接続する相手をモノからコトへと広げて助動詞的な用法をも獲得するに至っているのである。

推量・推定などの意味を持つ助動詞の一群は、現代でも変化が激しい語の一つである。その中で「らしい」と「ぽい」が、時間的には少しずれるがとてもよく似た変化を遂げていることは、非常に興味深い。他にも、近年、接尾辞の「げ」などが若者の間では新たな用法で用いられているようである。さらに観察してみたい。

最後に、最近の「らしい」の変化に触れておく。

学生たちが女性の友人を評して「〇〇ちゃん、男らしいよね」などというのを聞くことがある。このような場合、褒め言葉として「男らしい」が用いられているようで、「男っぽい」と「男らしい」の違いは、実際に男かどうかではなく「男っぽい」が中立的、「男らしい」がプラスという価値判断の違いになってきているとも見える。ただ、その裏にある男女についての価値観の問題はともかく、「らしい」の用法という観点から言えば、この使い方は明治期の「らしい」に逆もどりしているように見える。これをきっかけに「らしい」でもまた新たな変化が始まるのか、「ぽい」の用法の広がりとともに注視していきたい。

〈注〉

1 同書によれば、すでに見坊豪紀「ことばのくずかご」168回（『言語生活』311号1977.8）に「“ーぽい”がはやっている」という題で、「アザっぽい」「四角っぽい」「地名+ぽい」などが取り上げられているという。

2 確かに文章語としては使いにくい部分はまだあるが、少なくともよく耳にするし、自身でもよく使うように思う。

3「ぽい」の接続については、松井栄一（1983　p.170）にもあるとおり、一般的な辞書では「動詞の連用形や名詞などに付く」と説明されていることが多い。しかし、松井（1983）にも指摘されているとおり、実際にはそれ以外の形容詞･形容動詞の語幹にも付く。森田良行（1989　p.1023）では「ある種の動詞の連用形、形容詞･形容動詞の語幹、名詞に付いて」とされているが、これでも説明しきれない語もある。松井1983（p172）には「実は先のどの場合にも当てはまらない『しめっぽい』『むかっぽい』の存在が気になってくる」とされている。これらについて松井1983では「しめ」は「しめやか」などの「しめ」、「むか」は「むかつく」などの「むか」との関連を示唆し、「語根」と呼ばれるような単語以前の要素に付くことを認める可能性を指摘している。本稿でもこの松井1983の指摘するところに従いたい。ただし、語根に付く例はこのほかには殆ど見出せず、また現在では「むかっぽい」は殆ど用いない。

4 語彙大系はCD-ROM版で、大辞林はwebでそれぞれ後方一致検索をした。

5 松井栄一1983、森田良行1989

6 森田良行1989　にも「動詞はマイナス評価の自動詞に（中略）続く場合が多い」とある。

7 この語は次のような例である。「吐き気も催し、トイレに駆け込みました。 生酸っぽいものが出るだけ、お通じの中に血液が混じっています。」（2000.2.6）　実際にはどう読むのか、「生酸っぱい」の誤植かとも思われるが、不明。

〈参考文献〉

松井栄一（1983）『国語辞典にない言葉』（南雲堂）

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』（角川書店）

鈴木英明（1988）「明治期のラシイの変貌」『国語国文』57巻３号

小島聡子（1996）「『らしい』について」『山口明穂教授還暦記念 国語学論集』（明治書院）

［使用した辞書］

日本国語大辞典（初版（縮刷）、第二版）、大辞林（第二版）、広辞苑（第五版）、日本語語彙大系CD-ROM版